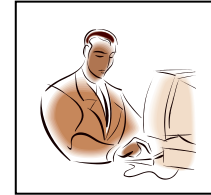


時代と人の交流さまざま

かつて人の付き合いは互いに会える範囲であった。年賀・年始の挨拶も、自宅を訪ねての挨拶回りだった。それが年賀状に取って代わられた。その年賀状が普及したのは日清戦争が始まった頃という。戦争で大変な時期だから直接挨拶には行けませんが年賀状でとなり、郵便も発達した。年賀状も一世紀を経て、電子メールでの年賀も珍しくない。メールでの年賀は失礼と言う人もいるが、実は、昔も「年賀状で済ますとは失礼」という時代があったから、歴史は繰り返す。



さて、パソコン・スマホが普及してネット社会になり、以前なら到底知り合えない人と繋がることができ、重宝される。SNS（Social Networking Service）と呼ばれるが、人間不思議なもので、一度は会ってみたいとなる。直接会えば単なる会合なのだが、「オフ会」と呼ぶ。オンラインが前提にあり、それを切って会うからオフ会。そこへ新型コロナウイルスによる在宅勤務とか外出自粛・外出禁止となり、人と会うことが制限されることになった。



すると今度は、オンライン会議が流行り、オンライン飲み会もある。いずれにしても、これが可能なのは、情報通信技術の著しい発達があるから。本来の人付き合い→SNS→オフ会→オンライン会議と世の中は動く。そのうちオンライン会議では物足りなくなり、結局は本来の人付き合いに回帰するか、それとも便利なオンラインか？
(山下輝年記)

編集後記

倫理の危機を生きる???

「地獄の最も暗きところは、倫理の危機にあっても中立を標榜する者のために用意されている。その言葉の意味が、いつにも増してはっきりと体得できた。危機の時代に無為でいることほど重い罪はない。」とは、2013年に発売されたダン・ブラウン著「インフェルノ」（差し迫った地球の人口爆発による滅亡の危機が差し迫っているのに、危機感を持たない世間に対する実力行使として、感染者の3人に一人を不妊にするウイルスを拡散させたというあらすじ）でのラングドン教授の述懐です。

確かに、地球の人口爆発とか温暖化問題は、深刻な問題なのでしょうが、危機感には相当の温度差があり、深刻だと思いながらも何らの行動を起こすことなく傍観している自分は、地獄行きだなと苦笑したことを覚えています。

ところが、今年に入ってから、2回も、「倫理の危機」が到来しているのです！

一つは、新型コロナ惨禍の最中にもかかわらず、検察への内閣の影響力増大に繋がるとも言われる検察庁法「改正」問題です。一般の方々の鋭い嗅覚に基づくツイートが瞬く間に広がり、元検事総長や元最高裁判事など検事OBの抗議に発展し、最終的には渦中の検事長の不祥事発覚によって幕が引かれたことは記憶に新しいところですね。

もう一つは、白人警官の制圧による黒人男性死亡事件についてのトランプ大統領のツイートを巡る問題です。暴力行為を煽る危険があるとして注意喚起したツイッター社の措置は、まさに、差し迫った倫理の危機に対する「有為」の行為でしょう。他方、「中立」を維持するとして何らの制限をしなかったザッカーバーグ氏（フェイスブック創業者の一人）に対する批判が高まっていますが、今後の動向を注目しましょう。

(新庄一郎記)